



11月号

横浜市立中田小学校

学校だより

第432号



中田小

学校教育目標

さわやか笑顔中田っ子 思い合い ひびきあい
共に生きる力を育てます。

平成28年10月31日

中田小ホームページ

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nakada/>



実るほど頭を垂れる稲穂かな

副校長 今野 敏晴

秋も深まり、中田小でも収穫の秋を迎えています。個別支援級のなかよし農園ではカボチャを収穫し、2年生の畑ではサツマイモ、5年生は学校田で稲刈りを行いました。2年生、5年生は、レッドキャップスさんに収穫のお手伝いをさせていただきました。

5年生の稲刈りを見学し、日本の稲作文化について考えてみました。日本の歴史や文化は、稲作を抜きにしては語れませんし、日本の社会のルールや考え方に大きく影響していると考えられます。

一般的に欧米人は、アジア圏より個人主義であると言われています。その違いを主食の穀物の生産である稲作と麦作に注目して、アメリカの大学が調査を行いました。その結果、歴史的に長く稲作を行ってきた地域出身の人々は和を重んじる全体主義的な傾向があり、麦作を行ってきた地域の人々は、自立した個人主義的な傾向があることが分かりました。

水田稲作は、田の底を水平にし、水深を一定に築き、水の流出を防ぐ畔を作り、また、水は上流から下流へと関連するムラ同士で平和的に話し合いをしながら引いていかなければなりません。我田引水（わが田に水をひく）のような自分だけの利益を優先させる身勝手な行動は許されません。どんどん変わる気候条件のもとに1年の中で細かく農作業の時期を決めて作業します。水量を適切に保ち、草取り、病害虫対策など、丁寧に田の管理を行えば行うほど収穫の高さに直結すると言います。麦作に比べ作業時間は、およそ2～3倍。努力が報われることが自然と勤勉性を養いました。また、作業は、家族やムラの人たちと気象の変化を的確に先読みしながら、集中的に、グループが統率された状態で活動しなくてはなりません。ムラでは、半家族的な連帯の強い、地域的な結束ができ、生活共同体を営んできたことでしょう。多少閉鎖的な社会ができあがっていたのも事実かと思われます。協調性と忍耐、そして相互扶助の社会習慣を生んでいきました。

稲作は、日本人が今もって大切にしている「和や礼節を重んじ、他人への思いやり、気遣い、気配り、そして、他人からの恩、気配りを感謝の心として感じる」という考え方や感性を養ったと考えられます。

これからの子どもたちは、よりグローバルな社会で生きていかなければなりません。上記の日本の文化や歴史、伝統を背景にしたアイデンティティの他に課題を発見・解決する力、情報活用能力、新たな価値を生み出す創造性、多様性を受容する力などが求められています。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」とは、日本特有の謙虚さや感謝の心を表したことわざです。稲穂は、確かに実った後で頭を垂れますが、稲の状態から、実を付けるまでは、頭を垂れることはありません。上へ上へ向けてぐんぐん伸びていきます。子どもたちには、仲間と協調しながらも失敗を恐れずに何事にも挑戦し、失敗から原因を分析して次につなげる経験を積んで行ってほしいと思います。無理に謙虚さを強いるのではなく、貴重な経験をして実力が付くうちに自然に謙虚に、そして周りへの感謝の気持ちをもつようになるのだと思います。

今後も協調性を大切にしながらもより一層一人ひとりの多様な個性が発揮され可能性が花開くよう、教職員一丸となって日々の教育活動の充実を図っていきます。ご理解とご協力よろしくお願いたします。

